

低感受性ゴキブリは作用機構異なる薬剤選択を タカラダニ防除には防水材塗布が有効

日本ペストロジー学会の第26回大会(大会長:酒井雅博・愛媛大学ミュージアム、実行委員長:伊藤泰太郎・愛媛県PCO協会会長)は11月4~5日の2日間、愛媛県松山市の愛媛県県民文化会館(ひめぎんホール)で開催された。

今大会にはPCO、薬剤・資材メーカー、行政など全国から289人が参加、1日目に基調講演、シンポジウム、一般講演、懇親会が、2日目は一般講演のほか総会、表彰式が行われた。

冒頭、酒井大会長が「地域に密着したPCOの在り方を考える大会としたい」と挨拶の後、基調講演「チャバネゴキブリの防除に関する研究」(渡部泰弘・㈱フジ環境サービス)では、薬剤感受性の低下したチャバネゴキブリの防除法に関する研究成果が紹介。渡部氏は感受性系統のチャバネゴキブリおよび防除に失敗した現場から採集したチャバネゴキブリを用いた実験から、農薬より新規性の乏しい防疫用殺虫剤では、作用機構の異なる薬剤の選択(有機リン系とピレスロイド系)により、感受性の低下を避ける必要があり、今後の課題として薬剤の感受性低下が回復するまでの期間と認可薬剤の交差抵抗性についての研究をあげた。

シンポジウムでは、「衛生害虫最近の話題」をテーマに、①愛媛県内における感染症媒介蚊幼虫の生息状況について(白石祥吾・広島検疫所松山出張所)②マダニ類の調査法とその実践例(山内健生・富山県衛生研究所)③カベアナタカラダニの生態と防除(大野正彦・東京都健康安全研究センター)の講演3題が行われた。



「地域に密着したPCO」をテーマとした今大会は全国から289人が参加

白石氏の講演では、愛媛県内の感染症媒介蚊幼虫の生息状況調査が報告され、ウエストナイル熱媒介蚊が7種類確認されたほか、デング熱やチクングニヤ熱を媒介するヒトスジシマカも多く採集されたことから、白石氏は「媒介蚊の発生場所、時期、種類等をあらかじめ調査しておくことが必要」と述べた。

山内氏は、吸血被害だけでなく、人獣共通感染症を媒介するマダニ類の最近の動向、採集・同定法などを解説し、日本国内での調査事例、刺咬症例等についても紹介した。

大野氏は、東京都で毎年5~6月を中心に建物やその周辺で大量発生するハマバアナタカラダニの生態調査と防除法について報告。防除については、防水加工された建物屋上でのダニが少なかったことから、防水材による野外実験を行ったところ、忌避効果や発生数の減少が見られ、防水剤塗布は有効な防除法の一つと考えられるとした。

一般講演はゴキブリ、アリ、ネズミなど計32題。このうち、「防虫ブラシの各種昆虫の侵入防止効果について」(森陸行・㈱パーテックほか)では、ショウジョウバエ、チャバネゴキブリ、アルゼンチンアリを用いた防虫ブラシによる侵入防止実験が報告され、ゴキブリは2cm以下の隙間で侵入できなくなるなど、3種とも侵入防止効果が確認されたとした。

また、「粘着トラップを避けるゴキブリ」(神谷桜ほか)では、床置型粘着トラップで捕獲されなかったゴキブリ(経験個体群)と、粘着トラップ未経験の個体群の捕獲率を調査したところ、経験個体群の捕獲率は低く、同一施設での長期間設置や頻繁な使用による生息調査には留意することが必要とした。

最近その被害が問題となっているトコジラミについては、「揮散型薬剤3種によるトコジラミに対する殺虫効力の評価」(橋本知幸・日本環境衛生センターほか)が発表され、市販の揮散型薬剤3種によるトコジラミ殺虫効力を比較したところ、p-ジクロロベンゼンとジクロロボス製剤では効果があったが、